

て其間を縫ひて出づれば、水は再び淺く、艇は再び膠しぬ、深き膝を没するばかりにて、水底角石散布し、一たび之に乗せば、足爲めに傷づく、加之、風は益々吹き暴れて、陸上にあるさへ尙ほ毛髮疎然とまて立つ、況んや水中に徒渉するに於てをや、寒是に於てか極まり、殆んど耐ふべからざるものあり、殊に水は愈淺く、數間の前方には、まばらに小石さへあらはれたるを見るにつけ、彼處までも曳くべきかと思へば情なくなりぬ、ふと小學生徒を顧みれば、凍えたる、かよはき手に力をこめて曳く有様の勇まき、衣は潮水にうるはひ、足は角石に傷くも、物の數とも思はぬ風情、嗚呼是も誰が爲めぞ、我等が爲めの助勢なるを、今更曳き止めしことのうら耻かしく、面相こそ鬼をあざむく者共なれ、義理に於ては確かに辨へし男一匹、高が十間餘の處、何程の事かあらん、一たび勇めば、千引の岩をもひかばひかなん猛者の面々、奮然として手に唾え、小學生徒に力を合せ、懸聲高く曳き出せど、牛の如く鈍く、象の如く重き艇は、曳く度毎に僅かに尺餘を進むのみ、時には懸聲のみ空しく上りて、寸分も動かぬことさへありしも、思ふ念力空乏からず、遂に深處に引き入れたり、曳き始めしより此に至るまで二時間を費やす、是に於てか、一全艇に上り、有志諸氏及び小學生徒に告別し、四時に至りて發す、

(未完)

文苑

習學寮十二境記 並序

稼堂 陳人

吾第五高等學校は、熊本城のたつみ、飽田郡に在り、南は白川にむかひ、北は龍田山の

すそ野に臨む、土地高く爽にして、邱あり、原あり、林あり、花あり、別て、よもの詠めの、四季に隨て麗はしく、朝夕のけしきの、晴雨につれておかしかりけるうちに、薨をつらねて並ひたてるぞ、習學寮なりける、一たびその樓に登りて、詠めやれば、山環り野曠して、遠方十里のはても、尺寸の間にあつまり、花紅に柳緑にまて、名所舊跡のながりも、枕席の下にあれば、これに對して、游焉息焉、學を磨き、術を習ひ、文をかき、奇をよむ、天機に觸れて、何ものか學びの種ならざらむ、此の種々のけしきを、我物になして、世のなりはひにも、たづさはらず、あけくれ、文をよむ、人々の羨ましさを、よそ目にも思ふ斗なるぞ、またこれこゝに遊ふ學びのともなりける、さるに、このとままで、その景色を撰ひて、ものせしものよなきは、いとく口をしきこと、と一日尋ねきて、おのれに謀る者ありけり、己れも常おもふ所なりければ、げにも、どうべなひつゝ、今茲戊戌の年、うづきの始つかた、聊いとまえたるほどに、先づ十二境の名どころを撰びて、その景色をも記さむ、とて筆とるなり、

わが物にしてこそ物はたのまけれあくたの野への四方のけまきを、なべて、山川風景のわが學寮の窓に入りて、その詠めとなれるもの、みな我物としてこそ、興あるべければ、名のもとよりなきは、いふもさらなり、あるものとても、わがうみの子に名つくるごと、それくこなたの名なくてやはとて、世のあざけりをも顧みず、名づけたり、その中には、むかまの名を、そのまゝとりたるもまじれり、から名をも添へしは、そなたの歌よまむ人のためにも、とてなりけり、

千代のはやし 千歳林

此の林は、本館の前なる西東にあり、はじめて椈をたてられ去時に、植られしなりけり、歲月を重ねること、わずかにひとむかしなれど、大御代の惠みの露深く、鬱々蒼々として、枝さしかわし、今は所せく、林なして、千秋の緑、雪の中に深く、十返りの花、雲のうへに咲かむ、その行末や、いかならむ、いとゆかき、ことに、月すみのぼる、夜半のあらしを、残し、よつの緒をかきならすこと、冷々索々として、空を拂つて、疎韻おち、心をすまし、塵をあらひ、木のもとには、草しげり、露滴りて、やをら、そのうちに、入れは、身はやがて、みやまの奥に、來りたらむ、こゝちぞすなる、學ひのとも、この木蔭に、やすらひて、うちまどろむ時、もあらん、文よむをり、もありぬべし、仰いでは、椈々のみさはをし、たひ、俯しては、颯々の聲をきく、誰か、凌霜の氣をふり、おこさいらむ、

たちよりて、たどへにも、せよ、色かへぬ、千代のはやし、の松の下蔭

かざしの園 好文園

千代のはやしを、すぎて、おくに、いれば、一むねの文庫ありて、學寮と相むかふ、その間に、この園は、あるなり、所せまければ、梅あまたうゑたり、春のはじめ、あまざる雪の、なべて、まだ木の葉の、しばみけるは、冬には、はや一華の開きて、天の下、春をしる、その上、むかし、唐の代に、この花、文學の盛衰によりて、色香のかはれりければ、やがて、文を好む木なり、と名づけしとかや、いひ傳ふる、これうさたることに、こそあれ、そのことわりは、げにも、とぞ覺ゆる、凡て、花の色、まさんも、匂あせなんも、人のこゝろにあり、この寮

にありて、一人だにも、學に怠たらんものゝいできなば、なほか一はの色うつろはざらん、と詠めやるほどにやうく花の敷をふ頃にもなれば、春霞、たつたの山の谷出で、梅の花、笠にぬふてう鶯の、まづこの園に音づれて、しばし翅を休へ、さてのらうちわたす、たけべの里、あさ霧のこぼれたの杜みやなほに遷りゆくもあり、あはれ鶯は、好文木の、色をかぎえて、ふるすに歸る、これら見るにも、こゝろあるもの、感なきにまもらじがし、

これもまた學の友の敷にとれ、花をかぎ去のそのゝ鶯

形見の花 留魂樹

此花は、中門の東なるすこし高き、丘のうへにあり、學びのどもの業を卒そへて、東あきまの空にたちさらんほどに後のかたみにもとて栽置きしなり、その中に、一木の松あり、これは、下官いにし年、まばし暇を乞て、郷に歸りしをりに、どいめたるなり、しるしの木にかいつけたる、

栽ておくかたみの小松色をへよ、學ひのそのゝ文のはやしに、この松も、花も、みないど若ければ、今はことさらに、見所のありとしもなけれども、いづれも、そのおひだちの勢、もうに見ゆる、後生おそるべしのをまへにも、おもひあはされてこれより十年とせばかりも、経たらましかは、

たちまじる松にかゝれるしら雪のふいきもよしや、花のしたみち、どいはる斗にもやなく、なんど返すくも、未たのもし、やよ、學ひのども、この木々になおくれそよ、

椎柴の庭　攢翠軒

花の下みちに傍て、東北さし、學寮の間に至れば、南寮北寮の前後左右に、一つらづ、
椎の木を栽ゑたり、これその庭なり、下窓のながめとては、是ばかりなれば、學びのど
もの、去りての後も、一入なつかしからんは、是なるべしとぞれもはるゝ、朝夕、小鳥の
いくつがひとなく、青柴がくれに千代くゞと鳴く、春の日も、やうく、永くなり、曉を
も覺えぬ頃などは、この聲に誘はれて、いつしか心もうさたち、日もさめぬべし、れも
へば、れも老ろし、椎のむらだちは、やがて小鳥のすみかとなり、小鳥の聲は、すなはち
學びのなぐさとなる、このなぐさありて、又の林にも、わけ入りぬべく、このすみかあ
りて、君が代をも、うたふべし、實にも、勸學院の雀は、蒙求をさへづるとやらん、いひ傳
へたる、徳は孤ならず、必ず隣ありとも、唐土のひじりも、の給ひける、
なれくゞて我をわするゝむらすいめさくもなぐさの椎柴の庭

穗波のはし　麥浪橋

大門のうち、通路の中らに、細江ありて、石のはしかゝれる、是なり、その江、水ながれすま
て、麥のはなみよる、學びの園にして、郊坵の趣を兼ねたりといふべし、頃もやよひの
春になれば、雲雀あがり、胡蝶ひて、こがねの花、袖にくんじ、緑の風、あやを織る、その
うちは、賤の男の、煙にすぎ、雨にかへす、林宗が葱もあり、信民が菜もあり、朝夕、葉末の
露わきて、その中をいきかふを見る、さながら、青海原の浪路をかちわたりするがど
とく、その間に、丘巖のさまいでたる、殆中洲の形なせり、もと江湖の詠めなきは、ひと

つゝの憾なるに、このけまきの海なして、橋さへかゝれるも、所がらとて、いとめづらかなり、まして、この裏には、不言のをまへありて、林宗か葱をみては、これをつみて、友情のあつくすべきをねもひ、信民か菜をみては、これを味て、万事のなすへきをしりぬべし、

をしへ草生ふといふなり風よする麥のはなみのみわたしの橋

聲すむ川 清響灘

夜にいりて、人もまつまり、空もさねゆく月のよころにもなりゆけば、わちたぎつ、流の音の一入たかく、錚々鏘々として千代の林の松風に和し、餘音のかのもこのもをわたりて、椎の軒端にしぐるゝ、一氣清空、心の底もすみぬべし、これぞ名高き、この國の白川なりける、夏も半すぎで、螢とびかふ、河風の、袂すしく、さし昇る、月のよすみ、さらにもた、羽化登仙の想ありぬべし、こゝら盡せぬ樂みも、あれど、そのけしき、この邊よりは、見ゆべくもあらず、只さやけき岩灘の聲、すみわたりにて、耳も心もあらふ所なれば、今はその聲をとりて、この境の名たぐひには、加へつるなりけり、物には、聲あり、色あり、色のみ物のけまきならんや、迅瀨水咽で、聲妄想の夢を洗ひ、青嵐風嘯て、響け空の秋を傳ふ、このうちの味を誰かしる、

誰かしる聲すむ川の聲さけばむねなる月もすみのほるとは

芝生の蘇鉄 鐵蕉塙

聲すむ川に背きて、中門をいれば、やがて本館の見つけに見わたるぞ、この芝生のそ

てつなりける、この物たる、千早ふる神代のなごりをとゞめたる物にしあれや、骨たくましく、はだむくつけく、かの獸ものゝきさといふものに、よく似たる、動植の境に生くるものゝ凌對とやいふべからん、あらかねのさくゆひめぐらしたる、親木のもどに、子孫ともの、すくくくとすくよかに、おひたちて、夏の日の、土さくる斗にてりはためくに、あやむ笠のごと、葉のひろどりて、茂合へりける、牛をも蓋ひつべし、あるよ、學びのとももの、このほどりをすぎつるに、何事か、さゝめく聲のきこえければ、たゞきみて、そとさゝぬたるに、このかみとれば、まきものゝ、おとうとをも、告げていはく、つらくく、おもふに、我等はらからの年々に數とふ、いづれも、骨たくましく、しゝこえて、見る目にも、うらやまるゝ婆にこそあれ、その高さ、よし昇るども、六七さかの外にいでず、年壯になりぬども、人の家の柱、國の棟ども、えならず、僅にこの庭のけまきをそふる料にせらるゝは、いかにいふがいなき身のうへならずや、かのあらのちらにあらばこそあれ、この學の園にありて、人どひとしなみに、おひたゝざる、おなかしこ、親の面伏おもむきは、いふも更なり、朝夕の人目にも、恥かしく、地にも入らんこゝちぞする、みなく、いかにおもひ給ふらん、志のある所、こよひ、つゞまず、言合せてんかし、といへば、弟ども、口をそろへていへらく、いまもおもひつかれたる、戔げにも、われらの不肖なる、はからず、所生をはつかしめまゐらすることのかなしさよ、いでや、これまでの怠りは、さもあらばあれ、今より後は、かたみに相勵みて、曲れるは、矯め、横さまなるは、直し、ゆくく、一かどのさねをなし、國門のかためともなりて、おやの恵に、

くいで、やむべきかは、ど各はをならきて、ふるひたりけるありさま、さすがにその名にも負かず、ゆかしくぞ見へたりける、どなむげにも、學びの庭にたてるもの、何物か、この心のなからんや、抑そでつの子等は、人にむかひて、はづかしといふ、しらす人にして、この物にはつる所なしや、

中々に世にもなびかす霜玄のく芝生のそてつ見つゝなるはな

手にとる山 對面嶺

蘇鐵の本より、ゆんでのかたをながめやれば、金峯山の峯の尾、いともくちかう見えわたさるゝ、むかしの人の、手にとるばかりといへるにとりて、かくは名つけたるなるべし、木々のむらがれる中に、萬戸のたちならぶ、蒼溟白波の上をほひをなし、城樓の高く聳ゆる、魚鱗鶴翼のすがたを見ず、さてこの山のそのうへに、突元としてぬきいでたる、春は花の霞たなびき、夏はさみだれの煙たつ、その見所の段々なるに、まして秋風の吹くかたなれば、籠の梢に、紅葉かつちる、しぐれの空の、そなたははれて、あくたの野邊の尾花の末に、夕日影の残れる、またなきけしきなり、ことにその樓に登れば、溪山の遠望、窓にかゝりて、懐古の情にたへざるものあり、一日學びの徒の、をゆびさしつゝ、問ひこし人に物語りする、先づこなたより教へ申すべし、城を隔て、南なるは、花岡山、西なるは、この山にて、段山、本妙寺などいふ名所々々も、この山本の里つゝきなり、さて北に當りて、見へわたる、歎尾の峯をば、二のたけ、三のたけなどとなへて、杉のむらたち、幾重ともなく、青雲の袖垣なせる峯つゝき、いづこも往に去西

南の戦に薩摩だけのをのなごりを留めたる所なり、音に高き田原の坂も、このついきなれど、程遠ければ、はのだにも見へず、扱々おもしろき詠めかな、されば、この後はありあけの海にて候や、げにも、有明の海、月の出汐に、真帆かけて、出入る舟の、追風になびく雲仙だけでも、手にとるやうなれども、この山のあなたなれば、見へ侍らぬなり、よくく、おもひやりて見給べし、と語つゝくるを、かたへにさくも、興ありて、この人、人は、さながら画中の人なりし、

告わたるをのへのかねの聲さへも手にとる山の秋の夕くれ
霜錦陵

目を轉じて、めてを見れば、この岡、目の下にあり、世には、紅葉山とぞいふなる、そのすみに、むかしよりの墓所ありて、秋山玉山、富田日岳などいふ、すさだちのれくつきも、こゝにあり、今は軍人のれくつき所となりければ、一きは、人のまうのぼるも多く、かの日清のえだちのうち死し給ひし大寺少將のゝを、始として、つはものどものはか、數へ盡すへきにもあらず、この丘にもみちする木の多くして、その色のからくれな、いなる、まださしぐれの秋の末より、夕日にさらすあやにしき、これ立田姫のこゝるばえにもあるべからず、皆々うづもれぬ名を留めし、昔の名たゝる人、今のいさをしき人の、ちまはの迷りてこそ、かくあるらめ、どおぼゆる、大君のへにこそしなめ、のどにはまなとといへり、このまごころのありてこそ、萬葉のもみじにも顯はるべければ、文よむ窓よりうちみるにも、

ますらをのあかさこゝろのさしそめてにはほふちまはがをうのもみぢ葉と仰が
さらめや、

黒髪山 雲髻山

さて千入加岡のうへには山しげ山のそゝりたてるぞ問はでもこの山としらるべ
き能因法師が歌枕に黒髪山は白川の邊にありとやらにかけるこれなり今は立田
山といへり泰勝寺といふ濟家の大古刹のありて細川殿香火の場なりしが今はあ
らためて殿の別業となしそのうちに祖先の神を祀り給へりむかし加藤肥州侯の
いはひまつり給ひし豊國大名神の社のあなどもありて山路の露ふみわけて登
れば境内にありし石とやらん苔むして累々とたてりうへにつたもまぢのねひし
げれるに今は音づるゝものどては松のあらま草むらのむしの音その麓に拜聖庵
なごいふ名所もありて由井の正雪が昔をまのふ巨巖なごもあれどどふ人はまれ
なりいづれも有爲轉變の世のすがた窓より詠めやるにもそゝろに悲風の煙嵐蒼
莽のうちより來るを覺ゆべしこの山を樓ごしにながむるけしき古の人の高ごの
ゝうへに山の出けるを垣の外ゆく人の髻ももどりをみるがごとしといひけるによくかな
ひてその名あだかもこの寮のために設けたらんがごどくそのをかひより雲の朝
に歸るもあり夕にたちいでゆくもあり雲にはこゝろなければ見ゆる人にこゝ
ろのあれば興味も一入なりけり、

いでゝいなばあめの下おほへうば玉のくろかみ山のみねのむら雲

ものゝふの原 鍊武場

これは、校の西にあり、千代の林をわきいりて、あらしの音も少なくなりぬれば、やがてこの原にいづるなり、こゝにて体操をならひければ、かくは名つけたり、春秋の時に従ひて、淺芽生のしげみに、百草の花さき出づる、目もあやなり、先、春の日影のうらゝかに、風のどかなる頃は、すみれ花さく、床のべに、草枕して、文みるもよく、夏の夕の暑さ、たへがたき頃は、千代の林に入りて、物考ふるも、心よげなり、しかはあれど、秋もはや夜寒の頃となり、松むぎ、さりくすの聲よわりゆく、旅のよすがら、衣かりがね、なきわたるほさは、いつしか袖の露しげく、思郷の情、どいめがたくやあらん、さて、三冬の寒き時どもなれば、いよゝ風さえ、霜こほりて、滿目荒涼の空、木がらしのさどふきたつよと見れば、やがてあられのたばしる日、どもいはす、この原に、うちむれて、身のよるひも、かろげにきなま、銃とり、あなみ揃へて、武を演ずる、中々にあはれなれども、是ぞ眞のものゝふのみさは、といふものにて、おほけなくも、この身は、ゆくゝ、吾がすめらみことこの門守なり、外つ國人の侮をふせぐものぞこのたゝ一すぢの志のあつければこそ、その寒きにも堪へ忍ばるべけれ、

一すぢの矢竹こゝろは玉あられふるとも、何にかものゝふのはら、はらのすみに、弓場もありて、時々ゆづるの音のきこゆる、いといさまし、

吹出の峯 吐龍峯

原を出で、東の方に廻れば、千代のはやしを、へだて、この峰の影落つる見ゆ、これ

ぞ、いはゆるあその神山なりける、世にありがたき火山にして、そのもとつ形を、千年の後までも、そのまゝにとゞめ、そのすぢの學びのためには、こよなき標本なりとて、うちつ國の學者のたゞり登るは、さらにもいはず、遠きとつ國の人さへ、遙々こゝに尋ねくといふなり、ふじの煙は、すでにたぬれども、この山の煙は、今に絶えせざれば、う／＼とたちのぼり、東に靡き、西にたゞよひ、その色の、黒き時はをちかたまでも、どぐらく、白き時は、その口までも、見えわたさるゝやうなりけり、さてその近き所は、より／＼よなどいふものゝふりて、見るも苦まげなれど、このあなたよりみるには、さるかたのわづらひもなく、春の曙、秋の夕暮、さては冬の日、ふるしら雪の下より、轟きわたりて、大空を凌ぐ、萬古の剛風も、吹きたゞす、阿蘇山上、一縷の煙を、やうたふべからん、そのけまき、えも言はずなれば、朝夕これをながむる人々のおもひも、取々なるべし、天地の理りは、呼吸のふたつにあり、この山は、その故よしを、ときあかして、餘あり、剩さへ九州の巨鎮となりて、巔を雲根のくらきにさしはさみ、よものむら山を子孫のやうに、したがへる、をゞしきすがたなれば、

いざ學び終へての後、はたかき名をふきでの峯の空にたてなむ、どの心おのづからおこりぬべし、あなたふど、

和歌

待花

雄

次